HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	職場・業務紹介 附属植物園
Author(s)	荒井, 道夫
Citation	北海道大学農学部技術部研究・技術報告, 1, 60-60
Issue Date	1994-03
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/35274
Type	departmental bulletin paper
File Information	1_p60.pdf

Hokkaido University Collection of Scholarly and Academic Papers : HUSCAP

荒井　道夫（鉢物園芸・バラ園・温室中庭担当）

◆職場紹介

昭和３０年（１９２１年）に附属植物園に採用となり東京より着任し園内で栽培中の植物の維持管理を担当、その後任務分担の明確化にともない温室担当となり現在至ってています。さらに近年はバラ園の管理も担当することになりました。温室ではシンビジウム、デンドロビウム、カトレア、バンダなど洋ラン類、バナナ、パパイヤ、パインアップル、ガバなど熱帯果樹類、ハイビスカス、ランタナ、ブーゲンビレアなど花木類、クンシラン、シクラメン、プリムラ、ベゴニアなど草花類、アロエ、カランコエ、キンシャチ、ハシラサボテンなど多肉、サボテン類など８７科、１５０属、約１万鉢（株）を３人の技官が分担して育成管理に当たっています。温室は四季を通じ公開しており植物の生きざまを実際に見学できる場を提供しています。さらに、電話・手紙による植物関係の質問・問い合わせに便宜を計っています。

◆仕事の内容

温室植物、花壇、バラ園で育てている各種植物の育成管理が主な仕事です。温室は展示温室２号（ブロメリア類）と、育成温室６号（草花、花木、観葉植物）室を担当しています。育成温室では多種類の性質が違う植物を育てているため原産地の気候風土、自生地の状態、生育の時期と期間、交配親の性質など種類の特徴を理解しながら作業計画を立て、作業を行う中でさらに、生育、健康状態に配慮しながら毎日の作業を行なっています。水・肥料やり、鉢替え、植え替え、株分け、株の更新のためのさし木、取り木、剪定などです。冬期と温暖期では生育環境が大きく変化するため草花類は生育の乱れが大きく種・品種の保存には気をつかいます。実生から育てる草花類は生育初期、育苗時期の管理が大変重要です。水やりの過不足で枯らすこともあり休日でも気になります。生長が目立つ時期は毎日姿を変えて生長します。害虫の加害、日焼け、根づまりによる根腐れなども発生します。鉢ごとの生育状態を見て水・肥料の加減にも気をつかいます。気温の推移、降水の量と間隔、日照条件の変化など生育に影響を与えます。生育の各段階で必要な手入れを適切に実行することに心がけています。

◆施設、設備、面積等

温室（２号、６号）１８０㎡、バラ園、温室南側花壇（約２０００㎡）

◆悩みや困っていること

温室の建物、暖房施設に合わせて植物を栽培しなくてはならないので、植物の性質に注意して配置を考え移動しなければならないこと。四季を通じ生育環境条件が大きく変わり過ぎるため生育障害が目立つこと。必要な仕事量に対して人員が不足していること。施設、栽培中の植物量の割に使える年間予算が約５０万円と非常に少なく必要な資材、種苗費が計上できないこと。時期に片寄って外部からの問い合わせ電話が多く、仕事中にかかってくるため仕事が中断されること、（手がはなせないこともある）。労働時間の短縮の影響で勤務時間内の仕事量が濃密となり、やりくり工夫が必要となったこと。

◆今後の方向または希望

自然と共存することの大切さは植物をよく理解しながら育ててみることが必要です。生育状態と生きざまを見ることができる植物園の役割は重みを増すばかりです。世界各地の代表的な植物を育成展示しながら育て方などの技術を提供する努力を続けます。